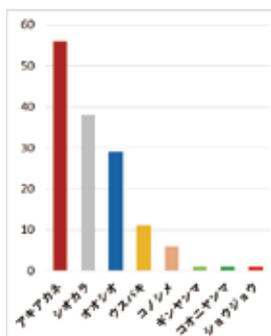


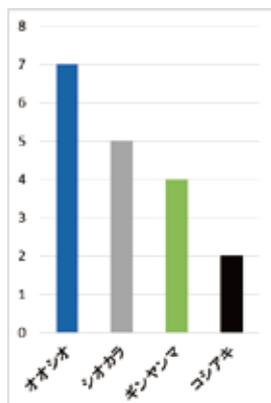
富岡総合公園



①5回
②8種 143頭
③池の背後に大規模な樹林地をもっており、かつて日本海軍の基地「横浜海軍航空隊」があった。8月にコオニヤンマが捕獲された。



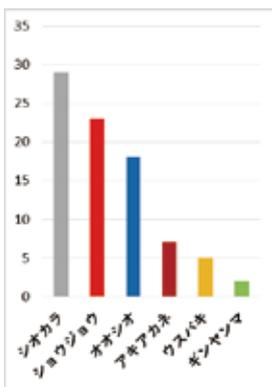
白幡池公園



①1回
②4種 18頭
③9月実施の一日限定秋スペシャル。50人近い子どもたちが参加。全体の個体数は少ないが、キンヤンマ、コシアキトンボを含め4種類捕獲された。



長浜公園



①5回
②6種 84頭
③汽水池もあり、人工干潟では野鳥観察も楽しめる公園。オオシオカラトンボやショウジョウトンボが多く、雨天の調査でも捕獲された。



三ツ池公園

今年度は、天候不良のため実施できなかった。



トンボはどこまで飛ぶかジュニア調査員が認定されました！

2019年11月2日にトンボとり大作戦報告会・表彰式が行われました（会場：JFE エンジニアリング シーフォーレ）。そこで、トンボとり大作戦に数多く参加し、トンボ調査の技術および知識を修得したと認められた子どもたち5名に、ジュニア調査員認定証が授与されました！これからは、一調査員として本調査にも加わって活躍してもらいたいと思います。

期待しているよ！



田原真由くん



三浦大太くん



中井寛亮くん



園部悠行くん



工藤祥真くん

今年のトンボ図鑑

2019年度の特徴的なトンボをご紹介します。

1. タイワンウチワヤンマ

ニツ池での8月の本調査にて、捕獲、マーキングされた。ニツ池では、2002年に飛来が確認され、その後たまに確認されている程度であったが、2016年からは毎年確認されている。2019年は、羽化殻も確認されたため、定着しているのではないかとと思われる。ヤンマと名がつくが、サナエトンボのなかま。ウチワヤンマに似るが、腹部第8節のウチワ状の広がり小さく、全体的に黒い。平地～丘陵地の抽水植物の繁茂する水面の開けた池沼に生息。近年、生息域が東進、北上している。横浜でも確認されている場所が増えてきており、ウチワヤンマと生息域が競合するため、継続的な観察が必要である。



2. コシアキトンボ

JFE トンボみちでの6月のトンボとり大作戦にて、産卵中のメスを工藤祥真くん(小5)が捕獲、マーキングした。JFE トンボみちでは初確認種である。腹部第3-4節に黄白斑があり、オスは成熟すると白色になる。人間の腰のあたり(腹部第2節～4節)がちょうど白く抜けているように見える。平野～丘陵地の、周囲を樹林で囲まれた池沼や河川の淀みなどに生息する。

横浜ではふつうに見られる種である。7月～8月に多く見られ、公園の池やお寺の池などでも見られる。



3. コオニヤンマ

富岡総合公園での8月のトンボとり大作戦に参加してくれたお父さんが捕獲、マーキングした。富岡総合公園では、2017年に捕獲されて以来の記録となる。

オニヤンマと名がつくが、サナエトンボのなかま。サナエトンボ科の中で最大の種。丘陵地の周囲に樹林のある河川中～下流域や小川に生息する。

横浜での記録は少ない。7月頃に流れのある水辺域に現れる。



4. ナツアカネ

本牧市民公園での9月のトンボとり大作戦にて、子どもたちが頑張って捕ってくれた79頭のなかに、ナツアカネが1頭だけ捕獲された。本牧市民公園では、過去に記録はあるものの、本調査およびトンボとり大作戦にて捕獲確認されたのは初めてである。

アキアカネより少し小型のアカトンボでオスは成熟すると全身が真っ赤になる。国内では、最も普通のアカトンボの一種である。平地～山地の池沼・湿地・水田などに生息する。

横浜では北部でたくさん見られるが、南部ではあまり多くない。6月中旬頃から羽化しはじめ、発生した場所近くの木の高いところで夏を過ごす。田んぼの減少等により、数が減っている。



5. ハラビロトンボ

東芝の本調査にて1頭、捕獲された。若い個体だったので東芝の池で羽化した個体と思われる。水草に止まっているところを東芝からの参加者が捕獲に成功した。臨海部本調査地点では、2009年にキリンビールで確認されて以来、10年ぶりの確認となる。

腹部の扁平な小型のトンボ。オスは、成熟すると腹部に青灰色の粉を帯びる。メスは、黄色の地に黒い条斑があるが、稀にオスのように粉を帯びる個体がいる。

平地～丘陵地の、抽水植物の繁茂する開放的な浅い池や湿地、放棄水田に生息する。

横浜各地で見ることができたが、どこも数を減らしている。



SDGs とトンボフォーラム



3

環境教育・学習の重要性

横浜市は、2018年に環境管理計画を改正しましたが、その中でSDGsの総合的な視点を活用した施策を展開しています。具体的には、改正の考え方として、従来の計画の根幹を継承しながら、環境分野と社会、経済、まちづくりの分野との連携による取組を一層推進し、また、すべての施策に関わる土台となる「環境教育・学習」を新たに位置付けて推進しようとしています。

同市の教育委員会は2016年度に「横浜市ESD推進コンソーシアム」を組織し、ESD (Education for Sustainable Development: 持続可能な開発のための教育) に取り組んでいます。2019年9月に開催された第30回全国トンボ・市民サミット横浜大会では、ESD推進校のひとつである市立南本宿小学校の児童、卒業生と先生がその活動を発表してくれました。

2

世界が直面する課題とSDGs

今の世界は、気候変動による自然災害の増加や生態系の破壊、国境を超える感染症の脅威、格差拡大、貧困に起因するテロリズム、難民問題、とさまざまな課題に直面しています。こうした課題に世界が一丸となって取り組むために、「持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals: SDGs)」を中核とする「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が2015年に国連加盟国の全会一致で採択され、2030年までの国際社会の共通の目標が示されました。



1

フォーラム活動 17年の成果と課題

2003年から始まった『トンボはドコまで飛ぶかフォーラム』の活動も今年度で17回目を終了しました。この間に、企業、市民、行政、専門家の連携により、「都市の緑地が里山の役割を果たすこと」、「トンボ相からみた個体群が臨海部で独自に形成されていること」などの学術的な見識が得られたと共に、当フォーラムに参加する企業、行政施設などで、生物多様性に配慮した緑地の質の向上が推進されました。

一方で、市民活動団体は会員の固定化、高齢化により新たな人材育成が進まず、地域連携のモデル的活動とはなったものの新たな展開や活動の広がりが思わしくなく、地域の環境を保全・再生することが「あたりまえ」になった時代では、企業としても新たな魅力や価値を見いだすことができない状況となっています。



第30回全国トンボ・市民サミット横浜大会



SDGsの17の目標





4

持続可能な未来をつくる子どもたち

同校では、30年以上前から学校近くのこども自然公園の敷地を借りて教育水田活動を行っています。これは、種もみの塩水選に始まり、もみまきや代かき、田植えや草取り、田網張りや稲刈り、脱穀から餅つきに至るまでを、昔ながらの方法で全学年が分担して行うものです。この活動を通して、子どもたちは自分たちの暮らす地域には、SDGsの中の「陸の豊かさ」や「パートナーシップ」があることを自ずと感じて、ESDの様々な活動を行うための素地を培っているそうです。そして、高学年になれば宿泊体験学習や修学旅行の機会をとらえて、持続可能な社会を実現するために必要な知識や手立てを身に付けてゆくとのことです。

5

こども座談会「SDGs とトンボ」

横浜市環境活動支援センター交流スペースのトンボ塾の塾生である小中学生7名と、トンボみちファンクラブの小学生2名による座談会でのことです。冒頭、SDGsについての理解度を尋ねましたが、今回集まってくれた子どもたち全員、SDGsについて学校で習ったことがないとのことでした。

しかし、17の目標が書かれた資料を手渡すと、それぞれの目標に対してワイワイガヤガヤと反応してくれました。世界が直面する課題について、子どもたちなりに感心を持ってくれたようです。また、「トンボを守るにはどうしたらよいか」という問いかけに対して、「生きものに興味をもってもらうことが大切」という話が出ました。「環境教育・学習」の重要性に子どもたち自身も気が付いているかのようです。

フォーラム活動の将来像ですが、従来からの「緑地の拡大と生物多様性に配慮した緑地の質の向上」を目指して、「トンボを指標とした環境調査」を継続することに異論は無いでしょう。そして、フォーラム参加団体が一丸となって、SDGsの総合的な視点から、「環境分野と社会、経済、まちづくりの分野との連携による取組を推進」するとともに、持続可能な未来をつくる子どもたちを応援するために、今まで以上に積極的に「環境教育・学習」へ取り組むことが大切なのではないでしょうか。

子どもたちを応援する立ち位置として、去る6月に行われたSDGs勉強会で原口講師が話していた、「大谷選手にはなれない昭和世代は、栗山監督になろう」という言葉を思い出しました。

(フォーラム事務局)



こども座談会



6

フォーラムの次なる展開

